

## 核兵器のない未来

アディヤ・ケリムバエワ

このテーマは私の心に深く響いた。私はカザフスタン東部にあるセメイ市（かつてはセミパラチンスクと呼ばれていた）で生まれ育った。そこは40年以上にわたって核実験が行われた場所である。今では信じ難いことであるが、1947年から1991年にかけて、私の故郷から130キロ圏内で、およそ500回の核実験が繰り返されたのだ。その被害は深刻なものであった。ソビエト連邦政府は、核実験がこの地域の人々にもたらす重大な健康や環境への影響を当初から認識していたが、それでも実験場は1991年まで閉鎖されなかった。実験場周辺の住民は、放射線障害、癌、神経系疾患、慢性疾患の重篤な悪化といった、取り返しのつかない健康被害に苦しんだ。カザフスタンの東部や北東部では、多くの子どもたちが放射線被ばくによる先天性異常や遺伝子変異を抱えて生まれた。

私が学んだセメイ医科大学には、現在も続く「平和博物館」がある。ここでは、実験場の歴史を知るとともに、放射線被ばくの甚大な影響について自分の目で見ることができる。幼少期から、こうした歴史に囲まれて育ったことで、私には核兵器のない世界を希求する気持ちが芽生えた。

前述の通り、セミパラチンスク核実験場で行われた実験は、地元住民に甚大な健康被害をもたらした。その当時、実験場の近郊には、いくつかの小さな村が点在していた。私が子どもの頃は何人もの親戚がそこに住んでおり、さまざまな話を聞かせてくれた。当時の住民たちは放射能について何も知らなかったし、これらの実験が危険だとも知らなかった、と彼らは言っていた。だから、住民たちは現代の私たちが花火に興じるように、これらの爆発の「キノコ雲」を見に出かけたという。この「ショー」の代価として、自分たちの健康や命を支払うことになるとは、彼らの誰も想像だにしていなかったのだ。

加えて、広大な土地が今も立ち入り禁止となっている。放射性粒子の崩壊期間が何百年にもわたるためである。

残念なことに、現在の世界情勢は混迷を極めている。連日のように、戦争に関する悲惨なニュースや、誰もが恐怖を覚える核兵器のリスクについての話題がある。ロシアによるウクライナ攻撃のニュースを初めて聞いた時、私は衝撃を受けた。これらはカザフスタンと非常に近く、密な協力関係を保ってきた国々であり、信じ難いことだった。既に一年以上が経過したのにもかかわらず、未だメディアでは連日、核兵器使用の可能性が論じられている。この種のニュースに対するコメントや議論では、「核兵器が攻撃に使われたらどうなるのか？」

「核兵器は防衛目的で使用すべきか？」といった疑問が多く寄せられている。

一部の政治家は、核兵器の存在が国家安全保障及び防衛にとって不可欠であると公然と口にしていく。私はこれについてずっと考えてきた。私の故郷が辿ってきた道を振り返って見たとき、これは平和の代償と呼べるのだろうか？自国民を守ることなのだろうか？何千万もの人々や子どもたちの実験後の苦しみは、この「平和」に値するのだろうか？

そして、戦争に反対する市民自身が、核兵器が使用された際にはその苦しみにあえぎ、その命で代価を払わなければならないのだろうか？ 私は断固、違うと考える。

第二次世界大戦末期に広島と長崎に原子爆弾が落とされた後、日本の人々がどのような状況に直面したかは想像を絶するものがある。瞬時に都市が消し去られたのだ。住民たちには何の責任もない。私は政治についてあまりわかっていないが、それでもこれが平和のために行われたことだとは思わない。むしろ、これは権力の誇示のために過ぎない。

私はその時代に関する本を読み、多くの映画を見てきた。たとえば誰かがちょうど仕事に行く途中だったり、学校や家に向かっていたり、近所に買い物に出ようとしている、まさにその瞬間にすべてが消えてしまうのだ。その事実は私にとって恐怖でしかない。この地球上から一瞬にして消滅させられるのだ。私は人類がその種の力を持つべきではないと確信している。

加えて、どんな紛争であれ、交渉によって解決されるべきだと私は考える。これは理想論なのかもしれない。それでも私は世界平和を信じている。

さらに、核兵器の使用は、直接の被害国だけでなく、世界全体の環境に甚大な影響を与えるものであることを想起したい。人類は既に地球温暖化や海洋汚染といった地球規模の問題に直面している。これらの問題を解決できる十分な資源は存在していない。であればなぜ、私たちはこの地球にさらなる害をもたらそうとしているのか？歴史が示すように、核兵器の製造や実験においてでさえ、環境と人間に取り返しのつかない被害が及ぼされてきたというのに。

私たちは過去に起こった出来事を変えることはできない。だからこそ、過去の過ちから学び、自分たちと次世代のためにより良い未来を創っていく努力を惜しんではならないのだ。核兵器のない未来を。